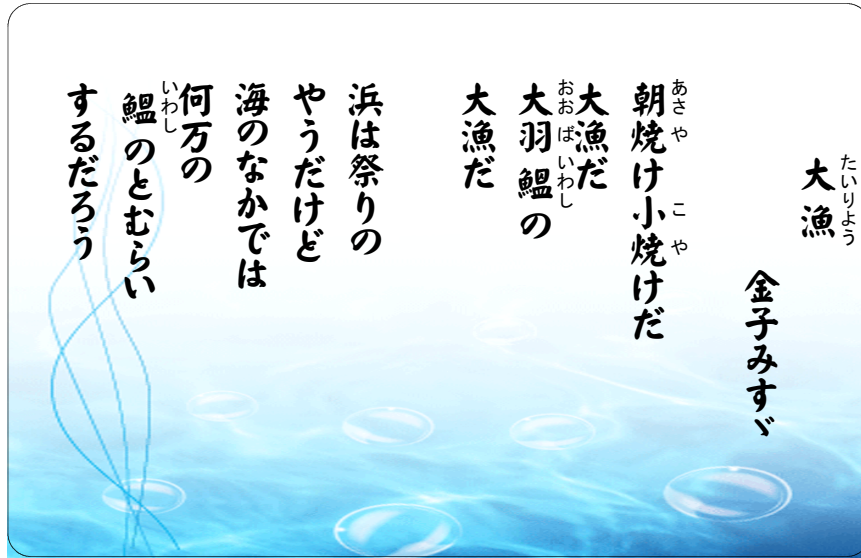


ある小学校の理科の授業の時、先生が害虫・益虫ということに触れて



たいりよう
大漁

金子みすゞ

あさやこや
朝焼け小焼けだ

おおばいわし
大漁だ

大羽鰻の

大漁だ

浜は祭りの
やうだけど

海のなかでは

何万の

いわし
鰻のとむらい

するだろう

よびごえ



浄土真宗

仏光寺派
光明山
光善寺

〒 915-0802
越前市北府 2 丁目 2-18
Tel. 0778-22-1222

説明した後、害虫・益虫の名前を羅列して、なにか質問はないかと生徒たちに尋ねた。日ごろ、腕白で先生を手こずらせていた A 君が質問した。「先生はどちらですか」と。

害虫・益虫は人間の知恵を中心として見た世界である。それに対して A 君は、そう説明している先生は害虫なのか益虫なのか、と尋ねたのである。これを根元的な問いということであろう。先生はこの A 君の質問にどうしても答えることができず、このひとことで初めて人間としての存在が問われ、仏法を聞くご縁となったということである。本来、害虫も益虫もないはずである。これもまた言葉の知恵が身についた人間の

傲慢さではないか。

「毛虫さん、信号は赤ですよ。あぶないですよ。」三歳の女の子のつぶやきであるという。横断歩道で見かけた毛虫に、思わず呼びかけたのであろうか。この女の子には、毛虫に対していささかの差別も嫌悪感もない。生命そのものを見ている。言葉の知恵で汚されていない幼子の素晴らしさである。これを仏さまの言葉というのではないか。たまわった生命は平等であつても、それを平等と受け止めることは人間には徹底してできない。ただひとつ、あるがままの世界からよびかけられることによつて、その事実に見覚めることはできる。その時、かろうじて人間の心を取り戻す事が出来る。信心とはその眼をたまわることだ。

『生命の見える時』

松本梶丸著

(中日新聞社)